



TOKYO CLUB

昭和59年11月27日

片岡道子様

島重信

去る19日は市立センターにおけのトリア・ヌオー第4回
リサイタルにお招きを受け有難うございました。ご案内状
に返書がしてありましたので、何が書いてあるか
鬼、珍しく会場がメモを取り翌日書き初めたので何か
何かで中斷され、先週後半は近頃の習慣になってこの第4回
での週末静養に出かけ、その日も目的を達せず帰って来まし
た。お葉書が待っていました。これは大へんと本日出先
のラブレターを書き出してあります。

お招きいただいた事、演奏を楽しく聴かせていただいたこと
に対する御礼の意味を感じた事、を遠慮なく申し上げる
ので、このは「お礼」といふより「高級なもの」はあり
ません。文字どおり思いついた事、を書き並べた印象記に
過ぎませんから、そのおつもりで気軽に受取って下さる
よう予めお願いしておきます。

今回のリサイタルにおけの演奏は、總論的に言って大へん
毎時の好いものであったと感じております。前回所聴した
時(多分1回聴いた)ので第2回だったと思っております)に較べて
かなり違った感じをしたので、どうにかと私なりに答えて



59.11.27

(108) 港区金田1-1-21-405

島重信



TOKYO CLUB

見た結果、次の々果を挙げて見たいと思います。

(1) 聴衆との融け合い

今回一番強く感じたことは、演奏を通じての聴衆とのコミュニケーションが着目されたことです。前回とは(これは極めずのコンサートかその)奏者はいい気分が楽しく演奏しているわけでも、それは聴かせ型や型演奏が聴衆の反応とは無関係なものでした。聴衆がどのように受取ることもそれは聴衆の勝手が、自分達はこういう演奏をするのだという態度です。奏者と聴衆との間にコミュニケーションが成立する場合は、奏者が聴衆がどのように受取ることを自然に促すものことです。聴衆の側から言っても、奏者が自分達のことを念頭に置いて演奏してくれているのだというのを感ずるから聴くことに喜びます。聴く者としては、この方がずっと楽しく聴けることは申すまでもありません。

(2) 各パートのバランス(役割)が目立って良かったこと。

前回とは(私の手紙にも書いたと思いますが)ギターパートの指導的役割が極めて顕著だったのに較び、今回は各パートがその時その時の自分の役割をよく認識して奏いておられたように感じました。換言すれば、如何にもアンサンブルの言葉にふさわしい演奏振りが、正しく「トリオ」と呼ぶに当ると思えました。

(2)から後は帰宅後続けで書いたものですが用紙が足りません。お許し下さい。

(3) マンドリン奏法の素晴らしさ。

(これは技術的奏法の問題で、合奏の効果を直接対象とするものではないです。前回以後この奏が大人達歩きおれたわけが面白い(1)が、前回私から不注意に聴いていたということがあるかも知れません。しかし、細部にわたる細心の注意が行き届いたマンドリン奏法に一言觸れたいとは思いません。)

(1) トレモロについて。単に美しいというだけではなく、実に堅実且つ均整の取れたトレモロ奏法には感服しました。途中で手抜きのないトレモロは容易に耳におこすことはできません。

(2) スティックの明快さ。実に適切な良いスチックが、特にupとdownの差がメロディーの流れを乱さないので、その配慮、逆はその差もある程度表に出すことによる効果(例えば連符をVVV VVVで処理する場合)等は、仲々心遣いの表現法であると思えました。

(1) (1)(2)を通い楽器から出た音に対する発配りは大へんなものであったことと想像します。マンドリンの音が単に可憐なものという認識を持っていた人には、あの着実、壮麗な音が

出せよのたしという事は驚きがあったことと思
います。

(二) 今一つ、トレモロとスチッカートの混在と音の
進行をあの程見事に処理された例は余り
記憶にありません。どんな奏者でも、またどんな
合奏団でもトレモロの部分だけが目立ち、スチッカ
ートの部分が際立って貧弱になるのが普通です。意識
して両者の(耳が聞く限りにおいて)均衡を心が
けておられたのだとしたら、大したことです。大きな
讃辞を呈します。

(4) (2)でハートのバランスのことを申しましたが、それは
別に] 協調と個性のバランスについて。

室内楽における永遠の問題とも言える「いかに
個性を主張するか、いかに妥協するか」の問題
です。三人寄れば三様の解釈と表現が出て来
るのは当たり前で、その調和を図って最良の効果を
み出すのが室内楽の醍醐味であろうと思います。
今回の演奏を聴いて、各奏者の解釈が同一
であるのに拘らず一つの音楽を創り上げて行く
努力の果が一致しておられたのは、聴いていて
気持の好いものでした。相互の理解と協力の
賜物で、Trioとしてこどもが成長されたこと
を誇りにされて良いのでは無いでしょうか。

以上、全体を通じて的印象を遠慮なく申し上げました。

プログラムの各曲について書いていたのは限りがあり
ませぬからこの辺で打ち切りたいと思っております。特に感
じた果をこぼ。

(イ) Vivaldi のソナタ。バロックの演奏としては小節
の頭の拍頭のアセントが稍強過ぎるかったで
しょうか? バロックの場合、低音のリズムを刻んで
押して行く進行が多いのでメロディーハートは
小節毎のアグセントを誇張しなくても進行の
区切りはひとりでにつくのでは無いかと思
います。

(ロ) アルベニス 「イヴリヤ」の足曲は曲全体のまとまり
を把握するのは少々難しいのでは無いかと想像
しました。これに較ぶると第4部の小曲集は
1曲毎のリズムがハッキリしていて、聴いていても
楽しい気分でした。特にマラゲーニャの思い切りの
よいリズム感に素晴らしかったです。

カクローニャの沖で、マンドリンかトレモロの連続の
途中でフレーズングの切小目を表現する箇所が幾つ
がありましたか。実に見事な切り方でした。お世評
は存じ感謝しました。

(ハ) イブニル 解説にもありましたとおり、いかにもフ
リス好みのしゃれた小曲集で、1曲ごとの風格を
あつだけ表現するところまでまとめたのは、大
へんな努力があったこととお察しします。「金の亀の
番人」のギターソロはさすがでした。あのような演

6
奏振りに接すると、余程り音楽は技巧では無いのだ
と気が付きます。

以上、思いつく事をざっくり書きしました。私なりの
印象記と受取ったただけでは「幸い」です。好い演奏を
沢山（多様に）聴かせたただけには「有難うござい
ました。他のお二人のメンバーにもよろしくお伝え
願います。

昭和61年6月20日

トリオ・ノーボ
片岡道子様

島重信

前略 17日の火曜日にはカワノ ミュージック ショップに
おけのコンサートにお邪魔いただき、コンサートホールとは
全然違ったふんい気の中で素晴らしい演奏を拝聴す
る機会を手に入れたことに対し厚く御礼申し上げ
ます。あの場所のサロンのようなふんい気は、聴く人が
言えば確かにコンサートホールよりもずっと緊張
して聴き入るのに比べてゆったりした(或いは寛ろい
な)気分が音楽を楽しむことができ~~る~~る有難いの
ですが、テーブルに着いた聴衆に向って演奏するの
立場はぜんぜんものになってしまうか？ ステージから距離を
置いて見下して演奏するのはかなり違った感じだ
はなにかと想像しますね、やはりにくいという感じは全
然ないものでしょうか？

今回の演奏は全体としてまとまりに結構でした。最初
に拝聴したのは4回位前のことだと思いますが、それと
比べると格段の違いです。これは別に上手になったとか
どうとかいう意味では勿論ありません。もともと上手
下手の問題ではありませんから。室内楽のensem-
bleという点ではもう何も申し上げることは無いと思
います。3人の奏者がそれぞれ自分の役割を100%理

61. 6. 20



東京港区白金台一丁目二
ホームマートキャピタル405
島重信
〒108 電話(0三)四四四一三六九九

解し、全員が協力して三重奏の枠組をしっかりと築き上げた上、その枠組の中で個人の色彩を出す術を会得しておられるようだから。

4=4の組曲は相当高度な音楽的内容を持った曲との印象を受けました。快心の出来栄で聴くことと想像します。併聴しては極めて短く、聴衆に何を語ろうと意図せよといふかわ明瞭にわかる感じでした。各楽章のバロック的な対比もはっきり出ていましたし、聴く方も奏者の気持の流れに乗って一緒に音楽している段階に近いところまで到達した感じでした。ハッサリアは稍おたく、意図されたものを抑えのみに時を速略に踏み込んだ感じでおかしくなりかけた時もありました。これは演奏の所出ではなく、奏者と聴き手との間の communicationが成り立たないかの問題かと思えます。

第2部は奏者と一併に演奏されたかどうかがという点では、曲を知らない者には「第1部より遙かに面白いことでした。レコードの方には共通した尺変があり、アムガマスは全く個性的である」ということでは(は)か?それでもコルドバ、セザリアはそれそれ何となくわかる(曲の中に入って行く)感じでした。初めの2つ、特にローターノは何故かとも取っつきにくい感じでした。これも演奏のせいではなく、聴いてはる言の感受性のせいであろうと思えます。

マンドリニの音色のしつかりしているのには感服しました。

矢張り毎日の奏いとおられる方は漢字を感しました。私共の現役時代でもあんなにしつかりした頼りにする音は初めから終りまで聴くには仲を出世といひ思ひます。スコートを齒切れよく弾きこなすこと自体がなげまなしい訓練を必要とするところを持つ楽器の1つに音色の特長を与えるのは容易なことではないと思ひます。(この点トシモロの方か——弾いてはるに音を奏えることが可能であるか——音色をコントロールするの容易ではないかと思ひます。)この点で来るところのアマの差がはっきり出るよう思ひます。

今回は(一列に並ぶのでなかったおかげで)萩原氏、富田氏と言葉を交わしながら楽しく併聴することができた。市毛、市川、高野の諸氏お月におきましては、このおかげで顔を見え果聴せよのは珍らしいのではな(は)か。いつも「マンドリニは他の人の演奏を減弱に聴きに来ないのは怪しからん」と不満を言つてはるに、嬉しい聴衆の顔縮小でした。

楽しい、また勉強になるコンサートにお招きいただきなことを深く感謝します。有難うございました。



166-□□

杉並区
片岡道子様
南三丁目
62-2

61.11.23



東京都港区白金台一丁目二
ホームレットキャピタル405
島重信
〒108 電話(03)4441-3679

昭和61年11月22日

片岡道子様

〒108 東京都港区白金台1-1-21-405

島重信

前略 去る11月18日ルーテル市ヶ谷センターでお催しのTrio Nuovo第5回 Recitalにお招き頂き有り難うございました。回を重ねる毎に内容の充実した立派な演奏会になって行くことは御同慶の至りで、拝聴する方も自分のことと同様に嬉しく存じます。

今回のプログラムはいろいろお考えの上お選びになったようですが、彩り豊かで聴衆には受けたことと思います。(尤も、民謡といってもデ・ファリアと続木さんの編曲されたイタリア民謡とではまるで趣が違い、前者は曲目解説にもあるように聴いていて民謡という感じは余りせずスペイン風の組曲といった感じでしたから、民謡を主にしたプログラムというようには受け取れませんでした。)

第一部バロックの2曲は落ち着いた演奏振りで好感が持てました。皆さん曲をよく呑み込んでおられ各パート間のバランスも良く、それぞれの役割をよく心得た演奏であったと思います。それに較べると第二部のスペインものは矢張り難しいのだなと感じました。われわれ日本人にはどうしても「後から学んだ音楽」になってしまうようです。皆さんの演奏が劣っているという意味ではさらさらありません。他のグループだったらなかなかあそこ迄は行けなかったと思います。寧ろ、Trio Nuovoの皆さんなればこそあそこ迄到達されたと言うべきでしょう。デ・ファリアでは、4のPoloのリズムの難しさに感心し、2のNanaはよく手に入っていて美しい演奏だと感じました。アルベニス原曲が原曲だけに(誰の編曲が存じませんが)これをTrioでよくも取り上げられたことよと、臨席の西村氏(連盟副会長)と共に大いに感嘆しました。しかし、流石に自信があればこそ上演されたのでしょう、練習の積んだ見事な演奏であったと思います。特にTrianaは室内楽の特色を遺憾なく発揮された好演で、聴いていて思わず引き入れられる感じでした。

西村氏とも話していたのですが、片岡さんのトレモロの美しさにはほとんど感心しました。ppの繊細な、しかも透りの良い音は絶品と言ってよいのではないのでしょうか。なべて

mfくらい迄は素晴らしいトレモロで、あのようにムラの無い連続音が奏けるとするのはピックの扱い方が余程優れている(親指と人差指の間に挟んだ圧力の加減と弾弦の瞬間の微妙なゆとり)からだと推測されます。イタリア民謡のCoren grato ではその美しさを十二分に楽しませていただきました。それに比べるとffの場合、時によるとup down のムラがかなりはっきり耳につくことがありました。(例えばスペイン民謡6のJotaの中で)上述の「ゆとり」がなくなった時に現れる現象かなという気がしました。

片岡さんのような大家にこのようなことを申すのは失礼千万であることはよく承知していますが、一方大家であるがために遠慮して誰も敢えて言い出さないということもあります。小生の年齢に免じて失礼をお許し願います。

何れにせよ大変楽しい、且つ充実したコンサートでした。真面目に精進している努力というものは自然に認められるものだということをつくづく感じました。マンドリン音楽界のこれはという方々が極めて多数来聴しておられたのはその証拠と言えらると思います。今回のRecitalの実りある成功を心からお祝い申し上げます。有り難うございました。

以上、ご厚意に対し厚く御礼申し上げます。Trio Nuovoの一層のご発展とご活躍をお祈りします。

草々不一